

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月20日現在

機関番号：32693

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2010～2012

課題番号：22592624

研究課題名（和文）

精神看護学実習における学生の感情知性の育成に向けた指導モデルの開発

研究課題名（英文） Development of a teaching model to foster students' emotional intelligence in psychiatric mental health nursing practice

研究代表者

武井 麻子 (TAKEI ASAKO)

日本赤十字看護大学 看護学部 教授

研究者番号：70216836

研究成果の概要（和文）：本研究によって、精神看護学実習においては、学生のみならず教員にとっても、自らの感情への対処が課題であることが明らかになった。とりわけ否定的な感情は、そのタブー意識ゆえに、それを認識し表現することに困難があった。学生の望む実習指導は、「ありのままを受け入れてくれること」、「感情の言語化への支援」、「学生グループへの支援」だった。有効だった指導としては、「学生の感情体験に関心を示して直接話し合う場を作ること」、「学生グループのダイナミクスを活用して感情の自覚や表現を促すこと」が抽出された。

研究成果の概要（英文）：

Result of this study revealed the difficulties not only in students but also in teaching instructors in dealing with their emotions which occurred during their practices. To express emotions, especially negative ones, was thought as taboo for them. The students expected "acceptance as they are", "support to verbalize their emotional experiences", and "support for student groups" from their teachers. Effective guidance was proved to include "concern for and open discussions on emotional experiences", and "making use of the dynamics of a group of students to facilitate them".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012年度	800,000	240,000	1,040,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・地域老年看護学

キーワード：精神看護学実習・感情知性・対人関係・指導ニーズ・否定的感情・言語化・グループダイナミクス・有機的連携

1. 研究開始当初の背景

日本においては 1998 年以降、毎年の自殺者数が 3 万人前後という社会状況が続くなか、「心のケア」へのニーズは高まる一方である。一方、現在の医療現場においては、医療技術の高度化や入院期間の短縮化に加え、患者の重症化や高齢化は進行する一方で、患者や家族にとっても、また医療スタッフにとってもストレスに満ちた過酷な状況になりつつある。看護実践の中では、深刻な無力感や罪悪感など、さまざまに感情を揺さぶられる場面が多く、こうしたストレスが、看護師の離職の背景にあることも知られている。

しかし、これまで看護学教育の中では、患者の心理については教えられても、看護師自身が現場でどのような感情を体験するのか、それをどう理解し、対処すればよいのかについて、体系的に教えられてこなかった。プロセスレコードやカンファレンスなど、対人学習のための方法は広く用いられているものの、実際にはどう指導していいのかわからない、難しいという現場の声はつきない。

さらに最近の看護学生の際立った特徴として、特有の自己中心的な傾向や他者からの評価を気にする一方で他者の感情に対する鈍感さがあること、友人とも表面的な関係しか結べないといった対人関係上の問題が指摘されており、メンタルヘルス上の問題を抱える看護学生も少なくない。

医療現場というストレスフルな場で働くために、看護師には、自分や他者の感情経験について理解し、それに圧倒されることなく、感情を使いこなす能力（＝感情知性）が必要になる。そうした力は本来、看護教育の中で、とりわけ実習場面を通して培うことが望ましいと考えるが、その指導方法や内容については、十分確立しているとは言えない。

そこで本研究では、学生、実習指導者、教員という立場の異なる対象の視点や体験に基づき、相互の関係性や感情の交流を分析するところを通して、精神看護学実習における、指導内容や方法について検討することにした。

2. 研究の目的

本研究は、精神看護学実習において、学生が患者との関わりの中で自己と対象についてのリフレクションを繰り返しながら、看護の基盤となる感情知性（Emotional Intelligence：EI）と対人関係能力を育成するための、教員・実習指導者の実践的理論的指導モデルを開発することを目的とする。

具体的には学生と患者および教員・実習指導者の間に生じる関係性のアセスメントと効果的な指導の方法を同定し、現場の状況と学生の実態に即した実習指導プロトコルの開発を目指す。

3. 研究の方法

(1) 卒後 3 年目以内の看護師 10 名を対象として、学生時代の精神看護学実習の経験について、デプス・インタビューを行い、そこで受けた指導の中で、とりわけ印象に残る場面と彼らにとっての意味を吟味した。

(2) (1) の結果をもとに学生の実習体験についての調査票を作成し、精神看護学実習を終了した 126 名の学生を対象に実習評価を行い、有効な指導やサポートを明らかにした。

(3) 現場で学生の直接指導に当たる実習指導者および教員計 18 名を対象として、インタビュー調査を行った。その具体的指導事例の中でとりわけ困難な事例から、実習指導のプロセスを詳細に検討し、学生を指導する上での困難さを生み出す諸要因、および効果的だった指導方法の実際について明らかにした。

(4) 実習指導者、教員、研究者を交えたパネルディスカッションを行い、学生の実態に即した指導の在り方について検討した。

4. 研究成果

本研究の結果から、(1) 学生の困難と学生が受けていた指導、及び指導ニーズ、(2) 学生を指導する際の困難状況、(3) 効果的だった指導方法、の 3 点が明らかになった。さらにそこから (4) 感情知性を育成するための実習指導ガイドラインが導き出された。

(1) 学生の困難と学生が受けていた指導、及び指導ニーズ

学生は、精神看護学実習特有の不安と緊張を体験していたにもかかわらず、実習初期にはこうした気持ちについての自覚は乏しく、それを言葉にすることも少なかった。その結果、指導者や教員にサポートを求めることもほとんどなかった。

また学生は、患者から拒否されたり、関係が思うようにいかず、患者に苛立ったりうんざりしたりする感情が生じ、患者との距離の取り方に悩んでいた。とりわけ否定的感情への対処の難しさに多くの学生が直面し、困惑

していた。

こうした困難に直面していた学生が受けていた指導には、①学生の話をよく聞いて、ありのままを受け止める「**受容・サポート型**」、②患者の背景やふだんの言動について情報提供解説するという「**説明型**」、③具体的なかかわり方や解説方法を提示したり、直接的に介入する「**問題解決型**」、④学生のかかわりに疑問を投げかけたり問題を指摘したりする「**直面化型**」の、4つのタイプがあった。

また、学生が実習指導に望んでいたことは、①学生のありのままを認めて、感情の言語化を助けてほしいという、「**受容と感情の言語化へのサポート**」、②学生の判断やかかわりを尊重し、関心を示しながら、気づいたことをフィードバックしてほしいという、「**学生への関心とフィードバック**」であったが、さらには、1対1の指導以外に、③学生全体のグループダイナミクスを理解してフランクに話せる場を作ってほしいといった、「**学生グループへの支援**」も学生の指導ニーズとして挙げられた。

さらに、具体的な方法としては、学生の自己理解を深め、かかわりを振り返るためにプロセスレコードが役立つと評価する学生が多かった。

(2) 学生を指導する際の困難状況

実習指導者は、指導する学生との関係において、その心理と行動を理解することが難しく、「患者に対する学生の反応や感情を理解できないこと」や「指導に対する手応えが得られにくいこと」に悩み、学生が患者に対して体験しているものと同じような、「学生に対して否定的感情を抱くことへの恐れ」を抱いていた。

また、教員との関係においては、一体どこまで指導すればいいのかという、「指導に対する責任の曖昧さ」の悩みもあった。こうした実習指導者が体験していた学生の感情に接近することの困難さの背景には、自分自身が受けてきた専門教育においては、あまり感情が重視されておらず、指導者自身のエモショナルリテラシーが十分でないという事情もあった。

一方、教員は、学生の背景などを知っていることが多く、その感情体験は推測できるものの、「助けを求めてこない」学生や、「感情を言語化しようとしないう」学生に難しさを感じる一方、逆に「激しい感情表出をする」学生に戸惑うなど、「学生の感情の取り扱い方」に困難を感じていた。

また、そうした学生の感情的な反応を実習の文脈の中に組み込んでいこうとする教員は、「学生の感情を指導やかかわりにどう生かすか」に悩んでいた。さらに、教員の中には、上司から「学生が傷つかないように先回

りしてフォローするように」と言われていたために、学生の感情に触れることに恐れを抱くなど、学内の教員同士の関係の影響も受けていた。

実習指導者や教員に共通していたのは、こうした困難さの背景には、「患者に心理的に接近できない」、「患者への関心よりも、患者に受け入れてもらえるかどうかの関心が高い」、「患者への否定的感情を認識し言語化することが苦手」といった、学生の傾向があると捉えていたことであった。

一方、患者への治療を第一に考える臨床側と、学生の教育を重視する教員とは、学生指導に関する判断にギャップがあった。教員はおおむね、臨床側の判断を受け入れようとする傾向が強かったものの、臨床側との関係で、「教育上の効果と臨床側の指導方針とのジレンマ」から、無力感を抱く場合もあった。

(3) 効果的だった指導方法

学生が有効だったと語った指導方法、および実習指導者や教員が有効だったと語った指導方法には、学生に対する個人的指導と学生のグループに対する集団的指導の両方があった。

①学生の感情体験に関心を示して、直接話し合う場を作ること

学生にとっては、具体的な助言の有無にかかわらず、教員や指導者が自分に関心を示してくれることがサポートとなっており、とくに直接話し合えたことが何より有意義であったと語る学生が多かった。こうした話し合いの場それ自体が、学生にとっては自分の感情を受け入れ言語化する機会となり、教員・指導者にとっては、学生の感情体験を理解し、その意味を吟味する機会となっていた。また、学生と教員・指導者とが、互いに理解と関心を示しながら、ともに患者へのかかわりについて考える関係構築の機会でもあった。

②実習指導者と教員とが協力し、学生グループのダイナミクスを活用して感情の自覚や表現を促すこと

学生が、患者とのかかわりの中で体験している感情、とくに否定的感情を認識し言語化することが困難なのは、それへのタブー意識が強いことが背景にある。学生グループ、指導者、教員が一堂に会するカンファレンスで、グループダイナミクスを活用して感情体験について話し合うことができれば、そのタブー意識はかなり払拭されることがわかった。また、カンファレンスの中で、他者から感情体験について関心と共感を示され、それが受け入れられる体験は、学生の自尊感情を高めると同時に、患者とのかかわりへの動機付けを高めることにつながっていた。また、こう

したカンファレンスの機会作ることを通して、実習指導者と教員とが互いに理解しあい連携できるきっかけともなっていた。

(4) 感情知性を育成するための実習指導ガイドライン

今回の研究からは、学生の感情知性を育成するための実習指導には、以下のことが不可欠であることが示唆された。

① 「実習指導者・教員自身の感情知性の向上」

今回の研究を通して、実習指導者や教員にとっても、自らの否定的感情の対処は大きな課題であることがわかった。とくに実習指導の中で体験される学生への否定的感情は、実習指導者・教員にとっても脅威であり、その対処が困難になっている場合があった。実習指導者・教員が、そうした感情の意味を理解する理論上の学習に加えて、自らの感情を自覚し、その意味を吟味できる機会とサポートは必須である。それを通して、指導する側の感情知性を向上させることが、学生の感情知性を育成する上での前提であり鍵となる。

② 「リフレクションの理解と技法」

看護においては、かかわりの中で自らの感情や行動、患者の感情や行動について吟味するリフレクションと、その後で振り返って何が起きていたのか、それにどのような意味があったのかを考えるリフレクションが重要である。それには、常識や理論にとらわれることなく、ありのままの学生の表現を受け取り、率直に反応を返す、リフレクティブなかかわりが重要であり、そのトレーニングも必要である。

③ 「グループダイナミクスへの理解」

感情の自覚や表現を促す上では、指導者・教員が学生と一対一で指導するよりも、グループダイナミクスを活用してグループ形式で行うほうが有効であり、リスクも低い。学生が指導者・教員から、個人的に感情について否定的に指摘されれば、学習意欲は低下し自尊感情も損なわれるようなことも、グループで同僚の学生から指摘されたほうが受け入れられることもある。

しかしグループ形式での指導も万全ではない。学生間のグループダイナミクスもまた複雑であり、教員・指導者は、学生グループの中で何が進行しているかについても十分理解しておく必要がある。また、教員や指導者がグループを指導の場にしようとすることは、学生の自発性や自然な気づきを阻害する危険性が高い。学生を中心に全体としてのグループを見る見方やスキルが必要である。

④ 「臨床側と教育側の有機的連携」

患者の治療を第一に考える臨床側と、学生への教育効果を重視する教育側とは、学生指導に関して、そもそもギャップがあるという認識を、臨床側も教育側も共有しておく必要がある。その上で、両者が話し合いを通じて理解し連携を深めていければ、学生にとってのモデルともなる。両者の視点や優先順位の違いは、患者やその場に何が起きているかを立体的に理解する素材となる。実習カンファレンスの場合は、学生指導の場であると同時に、指導者と教員が理解しあえる場でもある。これを教育的にも有効に活用することが重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

- ① 武井麻子、かかわりの中で患者の「生きる」を支える看護を学ぶ、精神科看護、査読無、39巻1号、2011、4-11
- ② 武井麻子、精神科看護師の感情労働、病院・地域精神医学、査読無、52巻3号、2010、2-8
- ③ 武井麻子、感情労働者のセルフケアとサポート、こころの健康、査読無、25巻2号、2010、2-8

[学会発表] (計2件)

- ① 小宮敬子、精神看護学実習における学生の感情知性の育成に向けた指導モデルの開発(第一報)、日本精神保健看護学会第23回学術集会、2013年6月16日、京都テルサ
- ② 武井麻子・小宮敬子、グループで育むエモーショナルリテラシー、第38回日本精神科看護学術集会(招待教育セミナー)、2013年6月2日、仙台国際センター

[図書] (計0件)

[産業財産権]

- 出願状況 (計0件)
- 取得状況 (計0件)

[その他] (計0件)

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

武井 麻子 (TAKEI ASAKO)
日本赤十字看護大学 看護学部 教授
研究者番号: 70216836

(2)研究分担者

小宮 敬子 (KOMIYA KEIKO)
日本赤十字看護大学 看護学部 教授
研究者番号：70288067

鷹野 朋実 (TAKANO TOMOMI)
日本赤十字看護大学 看護学部 講師
研究者番号：00409799

堀井 湖浪 (HORII HONAMI)
日本赤十字看護大学 看護学部 講師
研究者番号：40520763